

一般研究助成報告書

研究課題

近代の万国博覧会で展開された日本茶道——茶産業と茶文化の関係

ふじのくに茶の都ミュージアム客員研究員

吉野 亜湖

一、研究概要と目的

近代の万国博覧会において、茶道は賓客のもてなしや日本文化の表演としてだけでなく、日本茶や工芸品の輸出振興のために展示や喫茶店の中でも展開されるなど、複層的な役割を担っていた。国内の万博報告書、公式ガイドブックなど万博の公的資料と、茶産業界から発行された『日本茶業史』や茶業雑誌、海外向けに発行された冊子、また茶業会館、茶業研究所、茶関連博物館の資料や茶業関係者が保存している個人記録の調査により、茶道が万博の中でどのような役割を果たしたのかということを具体的に明らかにしたい。それにより、近代茶道と社会の関りについて、茶産業との関係から新たな一面を見いだせると考える。

また、万博という近代の巨大な国際イベントにおける展開は、開催地での茶道文化のイメージ形成にも大きな影響を与えたはずである。そのため、開催国現地の万博報告書、公式ガイドブック、新聞等の報道や周辺の書籍などを含めた関連資料にどのように記録されていたか、調査し分析する必要がある。そのような海外資料には、国内資料では描かれなかった具体的な茶席の様子も記録しているものがあるので、国内の資料の欠けている情報を埋めることも可能となる。

そのため、万博の開催地の現地調査での資料調査を行うことを予定していたが、本年度は海外調査が不可能な時期であったため、国内からアクセス可能な海外のデジタルアーカイブ資料を中心に調査を行った。今報告書には、明治期（前期として20世紀初頭まで）の主な万博で展開された茶道について、本年度のふじのくに茶の都ミュージアムの研究紀要に寄稿する原稿の要約を添付する。

二、今後の課題について

明治末期以降の万博に示された茶道の実態については、新年度にまとめる。また、明治期に關しても、緊急事態宣言などがあり、公共の図書館などで調査が不可能だったなど不十分な部分は新年度に補う。現地で見ることができない海外資料については、状況が落ち着いてから可能となればと行いたいと考えている。

なお、調査の過程で、直接万博の資料ではないが、海外資料の中に、近代の茶の湯の文献についても新たな発見があったので、茶の湯文化学会等に研究ノートとして報告する。また、カルフォルニア大学デビス校の4月23日オンライン国際茶学会でもこのテーマで発表する。

三、研究協力と資料調査について

国内の万博の資料に関しては、主に乃村工藝社万博資料館のご協力をいただいた。茶道に関する今研究は単独研究のテーマであるが、日本茶全体の海外展開として万博に注目した研究を井戸幸一氏（乃村工藝社）と二〇一八年度からはじめ、共同調査した資料を研究ノートとして提出する準備を進めている。今後の日本茶文化研究に役立てていただける資料となればと期待している。なお、当初調査予定としていた大阪府立図書館万博コレクション、高島屋史料館万博資料へは新年度に行う。近代の万博に出品や受賞歴がある香蘭社や深川製磁など有田焼の取材、そして近代以前の日本茶の輸出状況については、フェルケール博物館のご協力を得て、松浦史料博物館、平戸オランダ商館などの調査を広げることもできた。

公式報告書や公式ガイドブックについては、国立国会図書館、国立公文書館を中心に、先行研究も参考としながら行った。海外資料の所蔵先の情報提供に関しては、ロバート・ヘリヤ氏（ウェイクフォレスト大学）にご協力をいただいた。アメリカで万博コレクションを持つ以下の図書館、博物館の資料調査協力をいただいた。

UCLA 貴重図書館リサーチセンター（万博資料コレクション）／シカゴ歴史博物館リサーチセンター（シカゴ万博コレクション）／イリノイ大学貴重資料図書館（万博コレクション）／UC・バークレー大学図書館（万博コレクション）／スミソニアン国立歴史博物館アーカイブセンター

日本が海外向けに作成した英文の公式ガイドブック、アメリカ側の公式報告書やガイドブック、万博関連英文書籍は、アメリカ議会図書館、Hathi Trust Digital Libraryを中心に主に開催地の公共図書館で公開されているデジタルアーカイブ資料を閲覧することができた。本年度は現地限定公開資料については、未調査である。

海外新聞のデータベースでの調査は、国内からアクセスできる分に限られたが、有料サイトを含め、以下を主に行った。ウィーン万博については現地資料が未調査であるため、次の課題とする。

アメリカ議会図書館 (America's Historical Newspapers) , Newspapers.com (アメリカ) , イギリス新聞アーカイブ , ProQuest Central (アメリカ)

茶業資料に関する主な以下の所蔵先での調査協力をいただいた。日本茶業中央会、国立野菜茶業研究所については資料が多いため再度調査を行う必要がある。

ふじのくに茶の都ミュージアム、日本茶業中央会、静岡県茶業会議所、斎田記念資料館、袋井茶文化資料館、世界緑茶協会

附…ふじのくに茶の都ミュージアム研究紀要への寄稿原稿の要約（次ページから）

「近代の万国博覧会で展開された日本茶道——明治期20世紀初頭まで」

1. 前期として明治期に日本が参加した主な万博から検討をする。なお、近代の万博の解説では「茶の湯」と表記されることが多いので、本稿では「茶道」と同義に用いた。

2. 1873（明治6）年ウィーン万博

万博の報告書『澳国博覧会参同記要』¹によると、鳥居、神殿、神楽堂、日本庭園、売店が設置された。また同書に「一室二ハ台子ヲ据ヘ茶器を陳列シ」と茶道具の展示があったことが記録されている。

出品物を撮影した『澳国維府博覧会出品撮影写真帖』²に台子は見られないが、茶道具と棚が確認できる（図1）。同写真帖の「製茶」の分類で別に茶見本が掲載されているため、農産物の「茶」の文化としての茶道具を意識させる目的というよりも、輸出用工芸品としての期待が主な役割だったと考えられる。

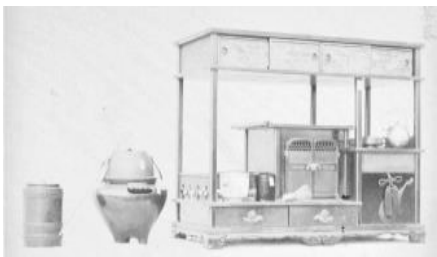


図1
「茶架茶器」『澳国維府博覧会出品撮影写真帖』
（早稲田大学図書館蔵）

3. 1876（明治9）年フィラデルフィア万博

明治政府は、日本館として二階建ての日本家屋と売店、日本庭園を造り、参加した。（『米国博覧会報告書第2巻 日本出品目録』³）茶の展示は農業館で行われ、茶樹の成長段階を絵で紹介し、見本茶が並べられていた（⁴）。茶道具は「許多の遊戯」の分類で、香道具と歌会道具と共に展示された。

3・1 公式出品目録の「茶の湯」の紹介

万博の日本委員を務めたゴットフリード・ワグネルが編集した英文の『費府博覧会日本出品目録』⁵（以下『出品目録』）で、「茶の湯」について「陶磁器」、「園芸」、「農産物（茶）」の三か所で述べられている。

「農産物」の「茶」の解説文中で、「茶の湯」の歴史、茶会の流れ、茶器について説明が茶に関する解説の三分の二ほどを占めている。これは、公的に英文で「茶の湯」が紹介された極初期のものであり、茶道史として記録すべき内容である。

「茶の湯」が陶磁器、園芸、農産物の解説の中で繰り返し紹介されたということは、輸出促進の役割を持たせられるという認識を持っていたということだろう。

3・2 茶器の展示

起立工商会社は「茶の湯」道具一式を出品し、他に、「製造物」の区画で古陶磁器を出品していた。同社の出品物は、あらかじめサウス・ケンジントン博物館（現ヴィクトリア&アルバート美術館）への納入を前提として選択されていた⁶。それ以外では、『米国博覧会報告書第2巻 日本出品目録』から陶磁器類だけでも、永楽善五郎、高橋道八、清水蔵六、宮川香山などの名があり、茶器と判別できる出品物は20点を超える。

3・3 万博から海外での展開について

(1) オーガスタス・フランクスと『出品目録』

大英博物館学芸員フランクスが、日本陶磁器の展覧会図録の執筆や、後の『日本陶器 (Japanese Pottery)』（1880）に、万博の『出品目録』の影響を与えた部分があると分析されている。序文には「茶の湯」が解説され、陶磁器の理解に茶の湯の知識を必要とした考えが見られる。

(2) クリストファー・ドレッサーの茶事体験

ドレッサーの日本視察旅行記『Japan: Its Architecture, Art, and Art Manufactures』（1882）に、京都府知事に招かれて「茶の湯」に参加した経験や、工芸品を説明する際にも「茶の湯」について記した。そして、この時期には知事が外国人賓客に茶事のもてなしを行っていたという事実も、記録しておくべき内容と思われる。



図2
日本の売店7

4. 1878（明治11）年第3回パリ万博

4・1 公式解説書の中の「茶の湯」

フランス語で作成された日本出品物の公式解説書『Le Japon à l'Exposition universelle de 1878』「茶・文化と栽培・製造」の中で、「茶の湯」は歴史を紹介する部分で取り上げられた。前回の万博の解説書と異なり、茶の湯の説明は短い。序文に「この冊子に目を通すことにより、様々な製造物について、その使い方などの十分確かな知識を持つ」ことを目的としているとあるため（安永沢）⁸、茶の湯は実用的な情報を主にする場合とは少なくなるという傾向がわかる。

茶に関しては、米国で日本茶の消費が伸びていた時期で、飲み物としての認知度は既にあり、文化面を伝える意義があったはずである。一方、ジャポニスムが蔓延しているフランスにおいては、日本茶の消費が少ない地でもあるため、茶そのものを伝えようという戦略が選択されたのだろう。

4・2 茶室と呈茶について

「茶室」では、日本の公式報告書『佛蘭西巴里府萬國大博覽會報告書 第二編』⁹から、呈茶もされていたことが記されている。

園ノ中央ニハ國風ノ小茶室ヲ築キ室内ニ銅、陶、漆器及ビ蒔繪ノ小書棚、花鳥の帖、盆栽等ヲ散置シ來客アレハ此室ニ延ヒテ我茶菓ヲ供セリ

1878年6月8日『The Illustrated London News』に掲載されたイラスト（図3）より煎茶が呈茶があったことがわかる。週間新聞『L. Exposition de Paris』（1878）の記事に、一般公開はされていなかったこと¹⁰、「オーナーがゲストを招待して茶を振舞っていた」ことが述べられている。

抹茶については、今井（2002）によれば、この万博の折り、フランス人美術評論家フィリップ・ビュルティの自宅に日本人が集まり、即興の茶会を催していたという¹¹。また、ビュルティは、万博の日本の建物で「茶人たちの小さな飾りのない茶碗」を見せてもらい、「粉末状になった茶を取り出し、それを小さな茶碗の1つに入れ」と、茶の湯とは書いていないが、「その習慣の手ほどき」がなされたと記している（今井訳）。限定客にはあるが、茶の湯の器の理解のために抹茶の点前を実演し、説明をしていたことがこれにより判明した。

また、東京国立博物館の伊藤（2004）の研究により、万博後にセーヴル陶磁器美術館に収められた茶道具も明らかにされている¹²。これら茶道具の理解のため、茶の湯の知識はフランスの日本陶磁器研究者の間で共有されていた。



図3
日本庭園内茶室内装
『The Illustrated London News』

5. 1893（明治26）年 シカゴ万博

5・1 鳳凰殿の中の茶の湯

鳳凰殿は宇治平等院鳳凰堂（阿弥陀堂）を模した純日本風の建物であった。岡倉覚三が英文の解説書『THE HO-ODEN』¹³を担当し、左翼廊は「藤原時代」、右翼廊は「足利時代」、中堂は「徳川時代」と三棟からなり、「茶の湯」は「足利時代」、禅の哲学に基づいた簡素で新しい生活様式が生まれた時代の文化として紹介した。「茶の湯などの美的行為は、それまでの長い内戦の後に、

心の静けさを取り戻すという仏教的役割を示す」と、前の万博では触れられなかった仏教の影響について言及している。鳳凰殿は、建築と美術の壮麗・優美さを示し、「室内装置ノ位置及用法ヲ知ラシメ」、国威発揚と貿易拡張という二重の目的を持っていた。（『コロンブス世界博覧会議事』『官報』1893・6・7）¹⁴ そのため、茶道具の配置も実用の過程を示すという趣旨に沿っていた。

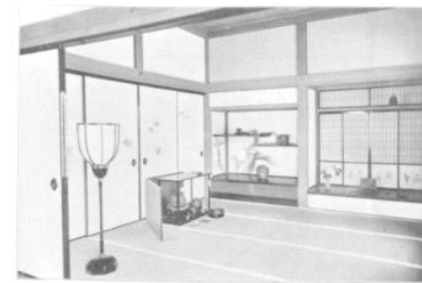


図 4-1
鳳凰殿内の茶室（『THE HO-ODEN』）

5・2 喫茶店での呈茶について

喫茶店は茶業組合中央会議所の運営で、数寄屋造りの「抹茶席」、御殿造りの「玉露製煎茶席」、四阿屋造りの「普通席」（紅茶、緑茶）の3棟で構成されていた。（『臨時博覧会事務局報告』1895）

久保田米僊『閣竜世界博覧美術品画譜第3集』（大倉書店1893）に描かれた「日本茶喫茶店」（図4・3）では、壁を外した部屋に台子を置き、点前座に女性、隣に袴を付けた男性が半東の様に座し、運びは男性が担当している。客は外の椅子に腰かけているなど、席の様子がわかる。さらに、1893年10月22日の『Chicago Daily Tribune』に、各国の喫茶店を取材した万博特集記事「Cups Cheer」¹²²、イラスト（図4・4）と体験談が掲載されている。

高貴な飲み物なら、日本の「儀式の茶」がある。凜とした日本人が、繊細な茶碗、紙ナプキンと菓子、土産用の小袋の茶を盆に乗せて目の前に置いた。茶碗は釜の前に座っている亭主に預けられ、彼が竹の匙で壺から粉になった茶を一匙すくって茶碗に入れ、竹の柄杓で大匙5〜6杯程度の湯を注ぐ。それから非常に興味深い道具「茶笥」で混ぜ合わせ、上品な接客係が客前に出す。菓子を食べてから飲む。茶は泡立った緑の液体で、この味の奥深さは一杯2ドルいや4ドルの価値がある。幸福感と亭主への感謝の気持ちが沸き立ってきた。

記事から、この時は男性が台子で薄茶を点てたことがわかる。他の茶産国の喫茶店よりも日本の記述が多く、かつ高級な茶文化として紹介されているため、日本茶のブランドイメージを上げる役割を十分担っていたと茶業界も認識したと思われる。



図 4-2
「日本の茶室（Japanese tea house）」
国立国会図書館蔵

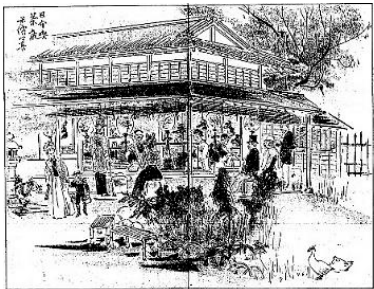


図 4-3
「日本茶喫茶店」
（『閣竜世界博覧美術品画譜』）



図 4-4
「CEREMONIAL TEA IN JAPAN」
Chicago Daily Tribune,
1893 年 10 月 22 日

6. 1904 (明治37) 年 セントルイス万博

6・1 農業館で展示された「茶の湯」

農業館に二畳程度の「御殿風家屋」を建て、台子で「茶の湯の式」をする永徳斎作の等身大人形二体を展示した。(『日本茶業史』) 茶の湯を日本茶の文化として中心に置き、その周りに茶壺前にガラス瓶に入れた茶葉を展示展開させていたのである。(図5・1) 茶の湯を等身大の人物で再現するという手法は、1915年サンフランシスコ万博、1926年フィラデルフィア万博など後の万博においても継承されていく。

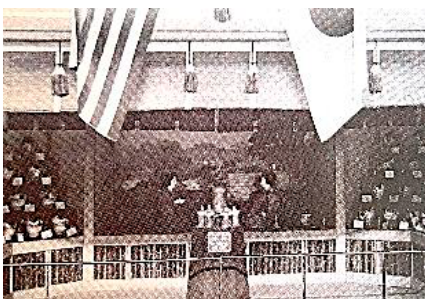


図 5-1
セントルイス万博農業館の展示
(『日本茶業史』)

6・2 ガイドブックの中の茶の湯

星一 (1873～1951) による英文のガイドブック『Handbook of Japan and Japanese exhibits at World's fair』(1904) で、「日本の代表的な製品である茶は、農業館で最も重要な展示品で、正面に tea ceremony をする2人の女性の人形がディスプレイされている」と、紹介している。ここで「茶の湯」のローマ字表記は使われず、英語で「tea ceremony」とのみ記されているのは、アメリカ市民に日本文化として認識されてきたことも要因かと思われる。

キム (2012)¹⁵ によると、セントルイス万博前後から「着物で茶を飲む」というスタイルが、アメリカの女性ファッション誌に見られるようになり、「tea ceremony」の体験記事も出現する。B. H. チュンバレンの『日本事物誌』(1890) 松本君平の『The Tea Ceremony of Japan』(『リッピンコット』1895)、W. ハーディング・スミス「茶の湯」(『ロンドン日本学会紀要』1900) などが出版されたのもこの万博前である。アメリカ議会図書館の新聞検索だけでも、シカゴ万博開催の1893年からセントルイス万博開催にあたる1904年までに「tea ceremony」を含む記事が150件以上を数えた。新聞でもアメリカ人が目にする単語になっていたようだ。

6.3 喫茶店での茶の湯

金閣寺喫茶店は金閣寺を模した3階建てで、茶業組合により運営され、ルーズベルト米大統領訪問時や貴賓への茶菓接待でも活用された。万博公式写真集¹⁶にも、美しい日本庭園と建物として、金閣寺喫茶店が紹介されている。(図5・2)「抹茶式」「煎茶式」の「優美なる技術」に長けた男女十数名を給仕人として日本から渡航させ、一等1ドル、二等50セント、三等25セント、四等10セントと、ランク別に菓子と茶(緑茶、紅茶)を呈した。

公式報告書に付けられた平面図(図5・3)から、3階は畳敷きで炉が切られていた様子がわかるが、どのように「抹茶式」が行われていたかは、新聞記者の体験記事「日本区のTea Ceremony」に詳しい。(以下抄訳)

「Tea Ceremony」は、上流階級の間で行われる儀式的なもので、現代まで伝えられてきた。佐野氏(Mr. K.Sano)は、東京で教室を開き、良家の子女に教えており、その生徒を連れて来た。日本の礼法はスペインの法廷以上に厳しいと言える。昔から客は5名以下と決められている。

そして、着物姿が優雅な「あべみね嬢」の点前で薄茶が点てられていく様子を順次解説している。記事に添えられた写真(図5・4)と記事から、台子を用い、「薩摩焼」の茶碗で点てられたことがわかる。この記事は全米の複数の新聞に掲載されたので、多くの人々が興味を持ち、目にしたといえる¹⁷。また、ミズーリ歴史博物館所蔵の写真(図5・5)から、唐銅の皆具であったことや天板に蓋と台付きの茶碗が乗せられていること、後方に炭斗も置かれている様子も読み取れる。



図 5-2
日本喫茶店 (ミズーリ歴史博物館蔵)

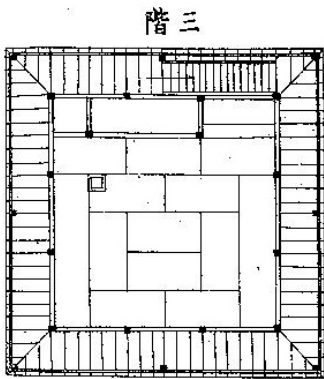


図 5-3
金閣寺喫茶店 3 階平面図



図 5-4
新聞記事の写真



図 5-5
日本館内装 (ミズーリ歴史博物館蔵)

キム(2012)の調査で、「日本」について触れた地元の新聞記事が万博開催年は前年比で2.5倍以上と増加したことがわかっている。特に呈茶する着物の女性たちは「ティーガールズ」と呼ばれ、マスコミの話題となり、日本の印象に大きな影響を与えたという。『St. Louis Post-Dispatch』1904年5月29日)

女性が点前を担当したのは、国内の茶の湯人口に女性が増えてきたということも理由の一つにあると思われる。1905年出版の『茶の湯』で、モラエスが女子の習い事としてすでに広まっていることを証言している。(田中 2013) 万博において、特別な誇張をしたりせずに、日本の当時の茶道文化を万博で表していた様子がうかがえる。

7. さいごに

明治期の万博では、純粋な茶道文化の普及という目的ではなく、初期は殖産興業政策と国威宣揚のために活用された。茶業界側が参加するようになると主に日本茶輸出促進の役割を期待され、その役割を果たしていた。開催国では、茶道具が現地博物館に収められ、日本文化研究の資料や知にもなり、アメリカでは新聞や雑誌記事を通じ、女性のファッションや喫茶文化など生活へも影響を与えていたことも具体的に見えてきた。さらに現地資料の調査を行い、足りないところを補いたいと考えている。また、明治初期から中期以降、国内の茶道文化の変化も万博で反映されており、今回とりあげられなかった周辺資料にも新しい発見があったので、公開していく予定である。

最後に、この研究を可能にしてくださったご協力者、関係諸氏に感謝の意を添える。

【主な参考文献】

- 熊倉功夫 (1980) 『近代茶道史の研究』 日本放送出版協会
熊倉功夫 (2013) 「近代の茶の湯」『講座日本茶の湯全史』 第三巻 近代』 思文閣出版
田中秀隆 (2008) 『近代茶道の歴史社会学』 思文閣出版
田中秀隆 (2013) 「外から見た茶の湯」『講座日本茶の湯全史』 第三巻 近代』 思文閣出版
東京公立博物館他編 (2004) 『世紀の祭典 万国博覧会的美術』
茶業組合中央会議所編 (1914) 『日本茶業史』 茶業組合中央会議所
大島清次 (1980) 『ジャポニスム』 美術公論社
Hellyer Robert (2017) Dueling Tea Rooms : Japan versus Britain for the US Market at International Exhibitions, International Research Symposium Proceedings : "Expo and Human History"
William H. Ukers (1936) All About Tea, Tea & Coffee Trade Journal

【注】

- 1 田中芳男, 平山成信編 (1897) 『澳国博覧会参同記要』
- 2 横山松三郎 (1873) 『澳国維府博覧会出品撮影写真帖』
- 3 米国博覧会事務局 (1876) 『国博覧会報告書・第2巻 日本出品目録』
- (4) Frank H. Frank Leslie's illustrated historical register of the United States Centennial, Frank Leslie's Publishing House, New York, 1877
- 5 Official Catalogue of the Japanese Section: and Descriptive Notes on the Industry and Agriculture of Japan, International Exhibition, 1876, The Japanese Commission, 1876.
- 6 木田拓也 (2016) 「万博にみられる日本陶磁の正統: フィラデルフィア万博 (1876年) とパリ万博 (1878年) における日本陶磁史のプレゼンテーション」『ジャポニスム研究 第35号別冊』ジャポニスム学会
- 7 Westcott, Thompson, Centennial portfolio, Centennial Exhibition, 1876. (Smithsonian Libraries)
- 8 安永幸史 (2012) 「起立工商会社の輸出工芸品製造事業に関する考察」『美術史論集』

- 9 仏国博覧会事務局(1880)「仏蘭西巴里府万国大博覧会報告書. 1」
- 10 樋口いずみ(2008)「日本の万国博覧会参加における「実演」とその役割に関する一考察――1878年パリ万国博覧会を事例として――」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊16号
- 11 今井祐子(2002)「1878年パリ万博と日本陶磁器：日本の茶器への関心はどのようにして芽生えたか」『国際文化学』(6)
- 12 伊藤嘉章(2004)「1878年パリ万国博覧会における日仏陶磁の交換」『世紀の祭典万国博覧会の美術』
- 13 Kakuzo Okakura, THE HO-ODEN(Phoenix-Hall), An Illustrated Description of World- s Columbian Exposition, Jackson Park, Chicago, 1983(HATI TRUST Digital Library)
- 14 三島雅博(1991)「1893年シカゴ万国博覧会における鳳凰殿の建設経緯について」『日本建築学会計画系論文報告集』第429号
- 15 Laura KIM, THE INFLUENCE OF ST. LOUIS 1904 WORLD- S FAIR ON JAPONISME THAT APPEARED IN PERIODICALS, 2012.
- 16 Sights, scenes and wonders at the World's fair: official book of views of the Louisiana Purchase Exposition, St. Louis, Official Photographic Company ,1904.
- 17 アメリカ議会図書館の新聞検索サイトだけでも以下の5紙などで掲載されていたのを確認できた。(The Camden chronicle, November 18, 1904., The Morris County chronicle., October 18, 1904.,The Brunswick daily news, October 30, 1904., The Pickens sentinel-journal, November 02, 1904.,The new enterprise, November 17, 1904.)